

青の大狼 《記録されない英雄》

綾式

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第一次大戦から始まる記されない英雄の戦記。

注意

この作品は素人の作者が原作よりも強いイム力を観てみたいという

思いで、書いています。文章構成などはかなり拙いと思うかも知れませんが、その辺りは、読書の皆様方からの指摘を参考にさせていただきます。

目次

第1章、開戦

プロローグ	開戦	1
第1話	ダルクスの少女	3
第2話	そこにある問題	6
第3話	イムカの仲間　そして、彼女の武器	8
第4話	万能にして未完成の武器、そして：	10
第5話	出撃	14
第6話	ギルランダイ才要塞防衛戦1	17
第7話	ギルランダイ才要塞防衛戦2	20
第8話	ギルランダイ才要塞防衛戦3	23
第9話	ギルランダイ才要塞防衛戦4	26
第10話	ギルランダイ才要塞防衛戦5	29
第11話	ギルランダイ才要塞防衛戦6	34
第12話	ギルランダイ才要塞防衛戦7	37

第1章、開戦

プロローグ — 開戦 —

帝国が、ラグナイト資源を求めてガリアに侵攻した第一次大戦の戦線の一つガリア戦線。この戦線は、ガリアの英雄ヘルゲン・ギュンター將軍率いるガリア軍機甲部隊によって撃退された。人々は、この英雄の誕生と戦果を喜び、そして尊敬した。だが、ガリア北部を帝国から護った守護者の名前を知る者は少ない。その英雄は、軍歴に記録されることは許されない：

征歴1930年2月に帝国皇太子暗殺事件をきっかけに突如開かれた東ヨーロッパ帝国連合。通称『帝国』と大西洋連邦機構。通称『連邦』の開戦の報はヨーロッパ各国の緊張を急激に強めていった。開戦してからは、帝国、連邦共にそれぞれ周辺国に侵攻を開始し、次々と国土を広げて行きながらも、両国の国境地帯では、一進一退の激戦を行なっていた。

そんな中、帝国と国境を接しているガリア公国という国家が存在していた。国土は帝国より遥かに小さい小国家であったが、国土の北部にラグナイト資源を豊富に産出する鉱山帯を所有しており、数少ないラグナイト産出国であった。この国は永世中立を宣言しており、この戦争の行方を見続けていた。時に、1932年4月の事であった。

〈ガリア軍部〉

「中将、連邦と帝国の動きは今どうなっている」

その言葉を軍令部の上座に座る太った身体の男が長机の横に座る男に話した。

「は、現在両国は互いに一進一退の状態のようです。ですが、両国共に国土を広げているようで、つい先月、帝国は南に接していたオストリアを、連邦は北に接していたスヴァニアをそれぞれ落としたよ

うです。また、最新の情報で帝国がフィラルドも落としそうだと報告が入っております」

「落としそうだ？そんな曖昧な内容ではいかん！確定

した事実のみを話せ。良いな、中将」

「は、申し訳ございません。閣下」

ふん!!？そう言うのと、閣下と呼ばれた男は葉巻に火をつけた。

この男が、現在のガリア公国軍軍部の中部ガリア正規軍の司令官にして、ガリア正規軍全軍の最高司令官のゲオルグ・ダモン大将である。

「それで、少将、ギルランダイオ要塞の守備状況は

どうなっているのかね？」

そう言っつて、今度は別の細身の男にダモンは話した。

「は、閣下。現在ギルランダイオ要塞は要塞守備隊3個大隊及び、国境警備隊三個中隊が守りについております。戦車の方も、最新式の軽戦車を20台要塞に配備しており易々とは抜けませんし、抜かせません」

そう言うのと、ダモンはまた、ふん！と言い席に深く座り直すと、葉巻の煙を吐いた。その後国内の補給基地の設置状況などを聞き、会議の終了を宣言しようとした時、一本の通信が飛び込んできた。

【ギルランダイオ要塞に帝国軍の大部隊襲来】

の一報であった。

第1話ダルクスの少女

ガリアと帝国の二つの国を接する国境線そこに存在するギルランダイオ要塞。帝国との間に有る山脈地帯の間に造られたこの要塞は、帝国と連邦の開戦までは国境警備隊、要塞守備隊合わせて約200名ほどしか居なかった。だが、開戦の影響を受けて急激にその配備数を増やして行った。そんな中、要塞に最初から居た部隊と中央から来た増援部隊の間である、問題が起きていた。

それは…

〈国境警備隊駐屯地近くの森〉

「スー…、スー…」

国境警備隊駐屯地にほど近い森の中1人の少女といってもおかしくない女性が、木にもたれて休んでいた。静かな夜の中、月の光だけが彼女を包んでいた。その光景は一つの絵になっていたもおかしくは無かった。だが、そんな光景を軽く壊す物がそこにはあった。それは、彼女が抱き抱えている彼女の身体を大きく超えるぐらいの大きさの武器であった。そんな武器を抱き抱えて眠る彼女は、そこの少女とは大きく違うという証であった。

その武器は近接戦闘用のブレードど中距離戦闘用の銃口を持っていて、もう一つの銃口が空いている。

その銃口からはかなり大きな弾が撃てそうだが、今は静かに月に照らされ、眩しい光を反射している。そこに、1人の男が近づいて来た。

「イムカ、こんなところに居たのか。警備隊の皆が探しているぞ」

そう眠っていた少女に声をかけた。すると少女は目を開き、

「問題ない」

とだけ言ってまた目を閉じた。

「問題ないって言われてもねえ…皆が心配しておちおち眠っていられないの。皆の元に戻ってくれないかねえ…」

と男が言うと、イムカと呼ばれた少女は目を閉じたまま淡々と

「私を心配する必要はない。ここで休んでいるだけ大したことじゃない」

と言った。

すると男はやれやれと言いながら、少女に言った。

「またあいつらになんか言われたのか？」

すると、イムカは目を開き

「私がみんなといると何かと問題が起きる。ならば私が戻らずにここにいればいいだけ。そうすればなんの問題もない。戻る気はない」

そう言うときまた目を閉じ眠りについた。それを見た男はやれやれと

ため息を吐くと静かに去っていった。

翌朝、イムカが目を覚ますと、周りにはイムカが所属しているガリア軍国境警備隊 第三小隊のメンバーがみんながイムカに近い場所で眠っていた。

ギルランダイ才要塞国境警備隊第2中隊第3小隊所属それがイムカの所属している部隊である。

イムカは帝国と連邦の開戦が始まる2月前に帝国に村を焼かれたダルクス人でギルランダイ才要塞に流れて来た。

12歳の幼さだったイムカはガリアでの居場所を求め、ギルランダイ才要塞国境警備隊に志願して入隊。その後第三小隊に配属となった。最初はダルクス人だからと

嫌われていたイムカも、警備隊と要塞守備隊の中で自分のポテンシャルを大いに発揮し、周りからの信頼を勝ち取っていった。

そんな中、帝国と連邦の開戦によって送られて来た増援部隊の隊員はイムカが気に入らず、事あるごとにイムカの妨害を行なっていた。それに気づいた最初からいた国境警備隊と

要塞守備隊の反撃により、ますます悪化。気づけば、イムカを信頼している二つの部隊と、イムカが邪魔な増援部隊の間で対立。そんな問題が起きていた

第2話 そこにある問題

〈国境警備隊駐屯地近い森〉

「なんでみんなここにいる？」

寝ぼけた頭をフルに回転させて寝る前の記憶を思い出しして行く。

「たしか…森で休んでいたら隊長が来て、それから…」

と考えていると、駐屯地の方から昨日の夜に来た男が近づいて来て、

「おはよう、イムカ。よく眠れたか？」

「ん、隊長。ところでこれはどういうこと？」

イムカは周りで眠っている仲間を指差して言った。すると、隊長と呼ばれた男が、

「おう、これか？昨日あの後戻るとな、おまえを捜してたみんなが戻って来ててな、んで、どいつもこいつもおまえを見つけたのかと凄く聞かれてな。仕方ねえからおまえの場所を教えたのさ。そしたらすぐにすつ飛んで行ったよ。よほど心配だったのかねえ」

と言いながら他の寝ている者らに近寄り、

「おう、おまえらー！、起きろー！」

と大声で起こして言った。

それを聞きながらイムカは駐屯地の方に歩いていった。その後、駐屯地に着くとすぐに3人組が近づいてきた

「よう、ダルクスのメス。今日は森の洞穴でも寝てたのか？」

「違うない。ダルクス人なんぞそこらの野良犬とおんなじだからな」

そう言うのと3人でイムカを嘲笑うように笑った。それを見ながらイムカはさも、道草を見るように立ち去ろうとすると3人の1人がイムカに

「なんだ？文句あんなら手出してこいよ。それとも怖いのか？」

「ハハハ、怖いのならダルクスの仲間の元にでも引きこもってる。油臭いメス犬があ」

そう言いながら3人が笑っていると、駐屯地の方から1人の男が、きて、

「おまえら、そこで何やってやがる」

と言いながら近づいてきた。その男はかなりガタイの良い体格をしていて、伍長の階級章を着けていた。

「うげっ、第1中隊の…」

「フートン伍長…」

フートン伍長と呼ばれた男はまっすぐこちらに歩いてくると、三人組に対し、

「おまえら、またくだらないことをしてるのか。この要塞に配属となりながらもそんなことをしているなんて、バカバカしいと思わんのか」

「しかし、伍長。こいつはダルクス人ですよ。いくら元々ここに配属されていた第1中隊所属の貴方が言おうと、こいつがここに居ることに納得行きません。直ちにこいつを追い出すべきかと。聞けば帝国側から流れてきたそうじゃないですか。こいつが間諜ではないという証拠がない以上、とつとと追い出すべきです」

「ふん、くだらん。イムカが間諜？それこそありえん。イムカは我ら警備隊の第2中隊のエースだ。帝国側から前から攻撃に来てた連中を

我らと共に倒してきた。元々ここに居た警備隊2個中隊の中でもトップクラスの戦績と戦闘力を持つてる。俺たちはこいつを信頼してるんだ。おまえら増援部隊とは違ってな」

そうやって居るうちに元々ここに居た2個中隊の隊員が少しずつ集まって来ていて遠目から明らかに警戒した視線を見せていた。

そのことに気づいた三人組は舌打ちをすると、そのまま自分たちの駐屯地に戻って行った。

「おう、イムカ災難だったな。しかしあいつらもしつこいな。大丈夫だったか？」

「ん、問題ない。でも、ありがとう」

「おう。まあイムカもあまり気にすんな。あいつらもそのうちわかるだろうしな」

第3話 イムカの仲間 そして、彼女の武器

〈国境警備隊駐屯地〉

ゴタゴタが終わった後駐屯地でイムカは自分の武器の整備を行なっていると一緒に寝ていた国境警備隊第2中隊第3小隊の隊員たちが駐屯地に戻って来て、隊員の1人がイムカに近づいて来た。

「おはよう、イムカ。朝から災難だったらしいな。聞いたぜ、第3中隊の連中がまた何か言っただってな。毎日毎日しつこい連中だな。ほんとに」

「ん、おはようアルフォンス。いつも通り耳に入れるのが早いね」

「ガリアの隼としては当然だ。まあ、それよりもだ。イムカ昨日の夜の事だがな、頼むから誰にも言わずにここから消えるのだけはやめてくれ。いくらイムカが俺たちの中で一番強いと言ってもだ。俺たちはかなり心配するんだ。これからは一言言ってくれ」

「ん、問題ない」

「お、解ってくれたか」

「心配する必要はない」

「問題しかねえ!!?」

そんな話をしているとさらに別の者が近づいてきた。

「何やってるんだい? あんたら。広場の端まで聞こえそうな声で、アルフォンス、朝っぱらからうるさいよ。年寄りの朝ぐらい静かにさせておくれ」

そう言いながら1人の年を取った1人の女性が近づいてきた。

「なんだ、グロリアばあさんか」

「ん、おはよう」

「ああ、おはようさん2人とも。ばあさんで悪かったねえアルフォンス。年寄りには敬うものだよ、全く」

「すまなかつたな、ばあさん。それじゃあな、イムカ」

そう言うと、アルフォンスはそこから離れて行った。

「まあ、いいさね。ああ、そうだ。イムカ、あんたが前に注文していた物が届いたよ。だけど、何に使うんだい? 軽戦車用の前面装甲を長方

形に形作った物なんて」

「ん、ありがとう。後で取りに行く。使用法を教える必要はないはず」「まあ確かに、教える必要はないね。だけど、気になるのさ。少しぐらい教えてくれても良いんじゃないかね？」

そうグロリアが言うと、イムカは前面装甲の置いてる場所に向かいながら、

「ヴァール」

とだけグロリアに言った。

「ん？」

「ヴァールに使う」

そう言いながら、イムカは歩き続けた。

「ヴァールに使うってねえ…今のままでも充分強力な武器なのに何を
する気なんだか…」

ヴァールとは、イムカが自分用に作った自作の武器でイムカの身丈以上に大きい武器である。見た目としては、近接戦闘と間接戦闘の二つを同時に行うことが出来るように作られていて、取手の部分に近接戦闘、間接戦闘に切り替えるためのトリガーが付いている。また、対戦車兵用の対戦車槍をつけるための大型銃口も開いていてそれだけ重量のある武器となっている。

第4話 万能にして未完成の武器、そして…

〈国境警備隊駐屯地・イムカのテント〉

駐屯地の中の自分のテントに戻ってきたイムカは自分のテントの中にグロリアが言っていた注文した前面装甲が置いてあった。すると、イムカは手に持っていたヴァールを側に置き、工具を取り出して作業を開始した。しばらくするとテントの外から声が聞こえてきた

「イムカ、今大丈夫か？」

「何？隊長」

その声は朝に起こしにきた隊長と呼ばれていた男だった。

「イムカ…とすまない、作業中だったか。少し良いか？」

「ん、何？」

「グロリアから話を聞いてな。軽戦車用の前面装甲を形まで細かく決めて注文したそうだが、何に使うんだ？装甲って事はシールドでも作るのか？」

男が聴くと、イムカはヴァールの元に戻りながら

「隊長の言う通り、シールドを作る。敵の銃弾ぐらいじゃビクともしないやつを」

と言った。その返事を聞きながら男もイムカのテントに入り

「だかな、イムカ。流石のおまえでも、ヴァールを持ちながらシールドを持つなど不可能に近いぞ。ヴァールを両手で使って軽々走るおまえでも、片手だとかかなりきついはずだ。そこはどうする気だ？二つ同時運用は不可能だ」

と言うと、イムカはすぐに

「簡単なこと、二つがダメなら一つにすればいい。なんの問題ない」

「二つがダメなら一つにしてそりゃそうだがな。どちらかを土囊とかに隠して運用するのかわ？」

「そんなわけない。言葉そのままの意味。二つを一つにする」

「言葉通りに…まさかっ!？」

そう言う息を呑むように驚いた男の姿を見ながら、イムカは淡々と、まるで当たり前前の事だとも言おうように

「ヴァールの側面に畳んでつけて、必要な時に展開すれば良い」

と簡単に言いのけた。それを聞いた男は、呆れたようなため息を吐くとイムカに向けて

「今のままのヴァールでもかなり重いはずだよな。それをさらに重くするのか？おまえの身体が持たんぞ。やめておくんだ、イムカ」

と諭す様に言った。それを聞いたイムカは

「おまえに私の限界を測る事は出来ない。今のヴァールはまだまだ強化の途中だ。それに…」

「それに？」

「今のヴァールはまだまだ軽い」

「は？軽いだと？ただえさえ重いブレードと対戦車槍を着けたヴァールがか？」

「ん。それに、元々ヴァールはこの装甲ともう一つのギミックを搭載したうえで完成と考えている。今のヴァールは未完成だ。完成したヴァールを運用するためにずっと身体を鍛えてきた。なんの問題もない。それに、最初軽装甲車用の装甲にしていたが、前に試しでヴァールにつけてみた結果、あまりにも軽かった。だから軽戦車用の前面装甲に変えた。もう接続も終わる。あとは、動作確認と、性能確認だ」

そう言うといムカはヴァールを持ったままテントの中に立ち、ヴァールのクリップを持ったまま銃口を上に向けると

「シールド展開」

と呟いて手元のトリガーを引くと、側面に畳んでつけていた装甲がヴァールとイムカを守る様にシールドが展開された。それを見ながらイムカは

「動作確認完了。後は性能確認だけ」

と、満足した様な顔をしてテントから出た

その後を追う様に男も外に出てイムカに

「性能確認ってどうやるんだ？まさか帝国の奴らの元に行くとか考えてないよな？」

そう言うといムカは直ぐに

「車両演習場に行く」

と言って歩き出した。

「車両演習場って何する気だ？」

とつぶやくと、イムカの後を追いかけていった。

〈ギルランダイオ要塞・車両演習場〉

「もう一度言ってくれるかな？ダルクスの子。冗談じゃ済まないぞ？」

そう言うのは、演習場に居た要塞守備隊の戦車兵の1人だった。

それを聴くとイムカはまるで雑談をする様に

「私に戦車を使って一発砲撃欲しい。タイミングはそちらに任せる」

と言ってそのまま演習場の中央にヴァールを持ちながら歩いて行った。それを見ながら言われた戦車兵はどうなっても知らんぞ。とつぶやきながら戦車を起動させ演習場に入っていく、イムカに砲塔を向けた。それからイムカに向けて

「本当にいいんだな？おまえに撃つのは俺なんだから味方殺しで軍法会議には出たくないんだよ。その辺はどうなんだ？」

「問題ない。演習場の見学席に私の隊長が居る。隊長が私が死んでも

私が望んだと証言してくれる。心配は要らない」

「そうかよ、じゃあ遠慮無く撃たせてもらう。カウントとかは無しだからな。精々頑張れや」

そう言うのと、戦車兵は砲塔の調整を行い、それからニヤニヤしながらスコープを覗いた。そして、直ぐに

「くたばれ！ダルクス人が!!？」

と、同時にドン!!?という発射音が響き、イムカは着弾の際の煙に包まれた。しばらくすると煙が風に乗って消えていき、その中にヴァールのシールドを展開して構えた状態のイムカがそこに居た。

「ん、展開速度、展開時強度、問題無し。私への被害、無し」

そう言うのと、ヴァールのシールドを収納して、戦車に近づいて行った。

「テストは全て成功に終わった。結果は満足できる物だった。協力感謝する」

そう言うと、イムカは演習場を立ち去ろうとした。その時、要塞全体に非常事態を告げる警報が鳴った。警報音が示す内容。それは、
【帝国軍来襲】であった。それは、1932年4月の事だった。

第5話 出撃

〈ギルランダイオ要塞司令部〉

「国境警備隊より緊急連絡!!? 当要塞東1.5 km圏内に帝国軍の大部隊を発見! 数、約2個師団!!? こちらに真つ直ぐ向かってきている模様!!?」

「2個師団だと!?? 今までの攻撃とは訳が違うぞ。直ちに要塞内全部隊に防衛戦準備の緊急警報を鳴らせ!!?、それと、要塞内の民間人を直ちにガリア国内側の門から脱出させる!」

「通信兵! 直ぐにランドグリーズの軍令部に帝国軍の大部隊接近の連絡を飛ばせ。要塞内での全兵力ではかなり厳しいぞ!」

「征歴1932年4月12日。この日、帝国軍はガリア公国侵攻の為に、国境にあるギルランダイオ要塞攻略に2個師団の部隊を差し向けた。これが、第一次ガリア戦線の勃発であった。」

〈ギルランダイオ要塞防衛陣地〉

「防衛第1陣地に国境警備隊第1、第2中隊が辺り、第2陣地を第3、第4中隊が配置についてもらう。いつも通りの配置だ。また、どちらの陣地も、突破された場合は直ぐ後ろの陣地に後退し防衛戦を行え。それが司令部からの通達だ。何か質問は有るか?」

「それが、作戦前ブリーフィングの最初の言葉だった。それに対しイムカが直ぐに

「要塞からの援護は?」

と聞くと、

「要塞守備隊が要塞砲並びに榴弾砲撃で援護してくれるそうだ。に、二つの防衛陣地に5台つつだが戦車、装甲車も配備するそうだ。他には?」

と隊長の男は答えた。すると直ぐに、

「部隊の補給線は大丈夫さね? 補給が途絶えたら拙いよ」

と、グロリアが尋ねると、

「陣地設営の際に掘った地下連絡道を通って運ばれて来るそうだ。また、連絡道の中にも進入されても良い様に要塞守備隊が守りに着くそ

うだ」

「ふん、私らが突破されても大丈夫とは、ありがたいねえ」

「他に質問は？」

みんな無言で隊長の顔を見ている。

「では、総員。配置につけ」

そう言うと、みんなばらばらに別れ、自分たちのテントに武器や装備を取りに行った。そして、そのに残ったのは、イムカと隊長の男だけになった。

「イムカ、おまえの準備は終わったのか？」

「ん、ヴァールにはいつでも出撃出来る様に弾薬とかは私の弾薬ポーチに入れてある。何も問題ない」

「そうか。それでは先に広場に行ってくれ。俺も準備してから直ぐに行く。じゃあ、また後でな」

「ん、また後で」

そう言つて、隊長の男はその場を離れた。そしてその場からイムカも広場に向けて歩き始めた。歩きながらイムカは

「2個師団の敵軍…今までの攻撃が無いような攻撃。大したことじゃない。私は、こんな所で死ぬ訳にはいかない。必ず、生き残る…必ず…!!？」

イムカは、戦場に着く前から、静かに闘志を燃やしていた。しばらくすると、イムカのそばにアルフォンスが近づいてきて

「イムカ、凄いやる気だな」

と話しかけた。イムカは直ぐに

「問題ない。今の私はやる気しかない。アルフォンスは？」

「ああ、俺も準備を整えて来た。いつでも行ける。しかし、敵の数が2個師団とはな、ついこの前の時は一個中隊とかそのぐらいだったはずなのに、えらい大軍だな。これは紛れもなく…」

「帝国によるガリア侵攻」

「だよなあ…：そういうやおまえさんと、別れた後に聞いた話だが、帝国はフィラルド王国を落としたそうだな。この前侵攻開始したと聞いたはずなのにもう落としたのか…：恐ろしい速さだな。帝国軍は…」

そう話していると、周りに他の隊員も集まって来た。そして直ぐに隊長の男がやって来て一番前に立った。それからこちらの方を向くと大声で、

「総員、聞け!!？」

とその場にいた隊員に話しかけた。

「これより我ら国境警備隊第2中隊第3小隊は他の小隊同様第1陣地の防衛を行う。全員、自分の命を大切にしつつ闘って行け。良いな！」

その声には隊員全員が、同時に敬礼する。そして直ぐに隊長の男から「国境警備隊第2中隊第3小隊、出撃する!!？」

それに合わせて全員一斉に出撃門から第1陣地に移動を開始した。

第6話 ギルランダイオ要塞防衛戦1

〈ギルランダイオ要塞第1防衛陣地〉

「偵察班より連絡。要塞に接近中の帝国軍未だ進路変更無し。すでに要塞に繋がる街道を行軍中。まもなく目視圏内に入る模様」

この報告が、第1陣地についたイムカたち第3小队に出迎えた。この報告を聞いた隊長の男は直ぐに隊員全員に向けて、号令を発した。

「総員戦闘配置！各員、直ちに配置につけ！」

この号令を受けて隊員が一齐に配置の塹壕に飛び込み、塹壕のそばの土嚢の裏に待機した。

〈第3小队イムカの班〉

班長を務めるイムカは、自分の持ち場についた後、じつと塹壕の中にしゃがんで、手元のヴァールを握りしめた。そうしていると、同じ班のアルフォンス、グロリア、マーキュリー、ガルドの4人が集まって来た。アルフォンスが直ぐにイムカに話しかけた。

「イムカ、もうすぐ接敵だが、緊張とかしてるか？」

だが、その問いをしたアルフォンス本人が、肩に力が入っている。見渡してみれば、周りの班員みんなアルフォンスと同じようなものだ。その問いにイムカは

「問題ない。いつも通り戦えば良い」

と答えた。それを聞いたアルフォンスは班員に向けて

「聞いたか？我らの班長は問題ない。いつも通りやれば良いと言った。そういうも通りだ数が多かろうといつも通り戦うことが出来るんだ」

そう言うと、周りの班の班員とアルフォンスたちイムカ班の班員も力が抜け、落ち着いた感じを見せた。その様子を見ながらアルフォンスはイムカに話しかけた。

「実際、どうなんだ？具体的に敵の数が二個師団だということが変わったがそれを聞いて、お前は何か感じたりしたのか？」

その問いにイムカは当然の事であるかのように

「特に何も、邪魔するならどんなものでも倒していけば問題ない。そ

れに…」

「それに？」

「立ちふさがるものは容赦なく排除していけばいい。敵に容赦など要らない。それは、邪魔でしかない」

と、力強く断言した。そのことに何か言おうとアルフォンスが口を開けたとき、イムカが帝国側の方角を見ながら、呟いた。

「来た…」

そう呟いたとき、イムカの雰囲気は急激に変わって行き、ヴァールのグリップを握りしめた。それを見たアルフォンスは直ぐに帝国側の方角を双眼鏡で見ると、その方角から、行軍の際に出る土煙を確認した。そして直ぐに驚愕の光景を目にする。

「おい…あれは確かに帝国軍だが…ただの二個師団じゃ無いぞ！、機甲師団じゃないか!？」

すぐさまアルフォンスは双眼鏡を見ながら無線を出すと、通信機に向けて

「こちら国境警備隊第2中隊第3小隊。敵の姿を目視で確認した。だが、敵は今までの部隊とは違う。敵は機甲師団で編成されてる模様。目視できる範囲で軽戦車4台を確認。まだまだ出て来ると予想。味方戦車の展開を要請する」

アルフォンスが通信を終えた後、直ぐに要塞司令部から通達があった。

『全部隊に連絡。敵は現在確認している現在、こちらに来ている師団は戦車主力の機甲師団であると確認された。総員、対戦車戦闘に切り替える。並びに、要塞内全戦車は優先的に敵戦車に攻撃を行え。また、要塞砲も敵の戦車に対し砲撃を行え。一台でも多く鉄屑に変えてやるのだ』

その通達を聞いた隊長の男は直ぐに通信で

「聞いたな？第3小隊各班、これよりそれぞれの持ち場を守れ。だが、無理はするな。命を大事にしろ。以上だ」

と通信が切れたとき、要塞の一部が突然爆破した。それを合図に、ガリア側からも一斉にランカーの砲弾が帝国戦車に向けて飛んでき

く。

ある。 征歴 1932年4月12日。ギルランダイオ要塞防衛戦の開幕で

第7話 ギルランダイオ要塞防衛戦2

〈ギルランダイオ要塞防衛第1陣地〉

お互いに重火力の戦車と対戦車槍の撃ち合いから始まったギルランダイオ要塞防衛戦は、開戦してから1時間が経過しようとしていた。当初帝国軍は第1陣地攻略に1時間もかからないだろうと予想していたが、要塞砲による高所からの砲撃に足を取られ、思う様に侵攻する事が出来ずにいた。また、防衛陣地塹壕が帝国側の予想より広がったため、それによる戦車の突撃が出来ずにいた。

〈イムカ班〉

塹壕からランカーの攻撃を続けていたグロリアは、自分が放った槍が敵軽戦車に一撃を加え損傷を与えたのを見て直ぐに再装填をしようとして弾を取り出そうとして、腰のポーチに手を入れると、弾がなく、弾切れであると気づくと直ぐに近くにいたマーキュリーに叫んだ。

「マーキュリー！支援兵としての仕事をしな!!?そこで丸くなってるんじゃないよ!!?」

そう言うと、塹壕の中で丸くなっていたマーキュリーが悲鳴の様な声を出しながらグロリアに弾を渡すと、また塹壕に隠れた。

「まったく…大の男が情けない声を出すんじゃないよ!」

そう言いながら先ほど自分が損傷させた戦車に狙いをつけランカーを構えると、

「喰らいなあ!」

と声を発し放った。グロリアの放った槍はまっすぐ飛んでいき、狙い通り軽戦車の側面に当たると、爆音を響かせながら、軽戦車が爆発した。それを見たグロリアはすぐさま

「敵、撃破!」

と無線を通して味方に伝えた。すぐさま、近くの班から歓声が上がリ、戦意が向上した。その様子を見ていたアルフォンスはグロリアに「お見事。また撃破数が増えたな。だか…まだ帝国側はまだまだ元気の様だな…」

と話した。

すると、近くで同じようにランカーを撃っていたイムカは塹壕の底に戻ると、直ぐに。アルフォンスに言った。

「行く」

アルフォンスは何と言われたか一瞬わからなかったが、直ぐに理解すると、イムカに怒鳴りつけた。

「行く…だって!?!まさか、敵の中に突っ込むつもりか!!?ふざけるな!こんな中に突っ込むなど死に行くようなものだぞ!!?正気か!?!」

するとイムカは、

「アルフォンス、私は問題ない。こんな所でくたばりはしない。みて」

そう言うと、直ぐにイムカは塹壕から出ると、身体を地面につきそうなぐらいかがめながら帝国軍に走り出した。その速さは、重いはずのヴァールの重さを感じさせない速さで一気にかけていく。

それを目撃した帝国の戦車兵はすぐさま

「前方よりガリア兵が1人出てきたぞ。砲撃をお見舞いしてやれ」

と自身の乗る戦車に指示を出し、イムカに砲撃を行なった。直ぐにイムカが居た場所に着弾し爆炎をあげたことを見ると砲塔を要塞の方に戻し、塹壕に向けて砲撃を行なった。その時、ガンという音を戦車の中で聞いた戦車兵は、何かと思い目を向けると、側面の装甲に穴が空いていて、そこから槍が見えた時、一瞬見たものがわからなかった。それが、戦車兵の見た最後のものだった。

少し遡り、イムカは自分に砲塔が向けられて砲撃が光った瞬間、ヴァールの装甲を展開させながらヴァールを持ち上げ、砲弾を受け止めた。直ぐに土煙が上がり自分の姿を隠している事に気づくと、そのまま一気にまた走り出し、装甲を収納しつつ、ヴァールのブレードを展開する。そして一気に近づき、戦車の側面にたどり着くと、ブレードを思いっきり戦車に斬りつけた。そして穴が空いた事を確認すると、ランカーを素早く装填、その穴に撃ち込んだ。すぐさま離れたイムカは、今度は直ぐ後方に居た赤色に塗装された戦車を見つけると、直ぐに駆け出した。途中でガリア側に向けて射撃を行っていた兵

士をヴァールのブレードとマグスを使い一気に仕留めていく。そのまま戦車に近づくと、背面に一気に近づき、そのままブレードを背後のラグナイト光を発するラジエーターに叩きつけ、その場を離れた。叩きつけられたラジエーターは大きく破損し一気に爆炎をあげた。その炎は戦車も巻き込み、一気に爆発した。そして今度は、爆発した戦車に気を取られて呆然としている横の装甲車にもブレードを叩きつけ、穴を開けると中にマグスの銃撃を叩き込んだ。内部を一気に破損、火がついた装甲車はそのまま一気に爆発し中に居た兵士諸共焼いていく。一気に二台の戦車と装甲車を失ったその中隊は、その中に中隊長も居た事により指揮系統を失い、大混乱に陥った。それを見たイムカは混乱している帝国兵を倒して行きながら、次の獲物である、帝国軍の重戦車に一気に近づいて行った。重戦車に乗っていた戦車兵は、すぐさま搭載している機銃による射撃を行なっていくが、イムカの速さに砲塔が追いつかず、死角の背面につけられると、そのままラジエーターに二回強い衝撃が加えられた音がして、それが最後に聞いた音になった。そしてイムカは次、また次と戦車、装甲車を撃破していった。

重戦車ですら止められないイムカの猛攻は、次々に帝国軍に混乱を広げて行った。その様子は、前線で戦っていたガリア側にもはつきりと伝わり、ガリア側は、最大の好機と捉え、一気に攻勢を強めた。対戦車兵の援護をうけ、突撃兵、技甲兵、偵察兵などが反撃侵攻を開始。これを見た帝国軍の師団長は、すぐさま無線で

『ガリア軍の攻撃が熾烈なため、進撃は困難と見る。全軍、直ちに後退、ガリア軍を振り切れ』

その命令をうけ、帝国軍が撤退を開始。防衛戦が開戦してから4時間ついにガリア軍の勝利に終わった。

第8話 ギルランダイオ要塞防衛戦3

〈ギルランダイオ要塞司令部〉

『こちら第1防衛陣地。報告します。我が軍の反撃により帝国軍が後退。我が方の被害は第1、第2中隊に被害が集中。しかし、全体的に軽微です』

その報が、司令部にあげられた時、防衛司令部は大きく息を吐くと、深く椅子に座った。開戦してから4時間、ずっと攻撃が続けられていた間、休む暇さえ無かったのだ。一息ついた後、司令の中将さすぎさま通信室に電話をかけ、室長を呼び出した。

「お呼びでしょうか？」

「ランドグリーズに通信は繋がるか？」

「は、繋がります」

「ならば、直ちに中央に連絡を出せ。要塞守備隊は、辛くも防衛に成功。敵は後退した。なれど、次の攻撃がわからない以上気が抜けないため、直ちに援軍派遣を要請する。以上の内容を送りたまえ」

「了解しました。直ちに中央に送ります」

そういうと、室長は司令部を退室して行った。それを見ながら中将はため息をつくと、窓から外を見た。外からは、夕焼けの光が入ってきており、忙しかった1日の終わりが近づいていた…

〈ギルランダイオ要塞??〉

ギルランダイオ要塞の??で、日が沈んだ夜の中、その者は懐から通信機を取り出すと、それに向かって話した。

『鴉より連絡。ガリア軍は要塞に入った。これより指示を待つ』

『親鳥より鴉へ、現在作戦は予定通り進行中。ガリア軍に悟られないように作戦行動せよ』

『了解』

「…全ては帝国の為に」

そう言うとその者は、すぐさまギルランダイオ要塞の城壁に向かって歩きだした。通信でやりとりしてたその場には、今は月明かりだけが優しく照らしているだけである。

〈ギルランダイオ要塞防衛第1陣地〉

陣地の中が見える位置のそばにある森の中で、ひとりの兵士が防衛第1陣地と、第2陣地の中を確認している。しばらくして、陣地の中にガリア兵がほんの少数いるだけだと確認した兵士は、近くに立っているガリア兵を静かに手に持つ剣甲兵用ブレードで切り倒していく。気づかれないように、一撃で首筋に死角から近づき、仕留めて行った。しばらくして、陣地内部にガリア兵が居ない事を確認すると、さっきでてきた森に向かって手持ちの明かりを差し向けた。するとそこから、帝国軍の兵士が10人ほど出てきて、ひとりひとりが持つ手持ちの狙撃銃を第2陣地に立つガリア兵に狙いをつけると静かに最初のひとりに合図する。全員の合図を確認した兵士は懐から懐中時計と信号弾を取り出すと、時刻を確認して、周りに向かって話した。

「作戦開始だ。攻撃始め！」

と言いながら信号弾を空に向かって放った。夜空に信号弾の照明が照らされる。それと同時に、パーンという音が一斉に響き次々にガリア兵が倒れていく。それと同時にギルランダイオ要塞城壁に設置されている要塞砲が大爆発を起こし破壊される。4月12日はまだ終わらない。

〈ギルランダイオ要塞城壁〉

数人の歩哨が帝国側を双眼鏡を覗きながら警戒していると、そこに1人の男がやってきた。歩哨の1人、上等兵の階級章を持つ兵士が直ぐに気づき、男に敬礼をした。

「お疲れ様です、少尉。何か御用でしょうか」

その男は、胸に少尉の階級章と、要塞守備隊第2中隊第4小隊所属だとわかる意匠の証をつけていた。少尉の男は直ぐに上等兵に話した。

「いや、気にしないで仕事を続けてくれ。少し、外の様子を見にきただけさ。気になってね」

そういうと、上等兵は「了解です」と話すと直ぐに身体を要塞の外に向け、双眼鏡に目を当てると警戒をしだした。すると、直ぐに少尉の男が、上等兵の後ろに静かに移動すると、素早くナイフを取り出し

上等兵の首に返り血がつかない位置から斬りつけた。上等兵の男の死体をその場の壁に寄り付かせて座らした男は、素早く要塞砲の砲弾装填装置に近づくと装填部を開けて、内部に爆薬を仕掛け、さらに砲弾を装填する。そして何事も無かったように装填部を閉め装置から離れた。そして、次々に別の要塞砲に近づいて行くと、同じように邪魔なガリア兵を倒していくと、要塞砲に爆薬を仕掛けていく。帝国側やがて、要塞砲4門全てに爆薬を仕掛け終わると爆発の範囲から離れ、懐から時計と取り出し、目でカウントしていく…10、9、8、7、…2、1、

「作戦開始」

それと同時に夜空に信号弾の明かりが点き、外に銃声が鳴り響く。それと同時に手に持っていた爆破装置を使い、たった今離れた要塞砲から爆音が響き、要塞砲が次々と内部から爆破されていく。そして、間を置かず、帝国軍歩兵大隊が森から出てくると、塹壕から要塞内に繋がる連絡道に向けて進撃を開始した。

爆破が終わると、男は直ぐに自分の部隊の方に慌てるように入り、混乱する部隊の中を通ると、まっすぐ自分の部屋に入り、マグスを取り出した。そして目立たない通路を通りながら、まっすぐ要塞司令部に歩いて行った。

第9話 ギルランダイオ要塞防衛戦4

〈ギルランダイオ要塞内国境警備隊駐屯地〉

「敵の攻撃」

そう呟いたイムカは自分のテントから出ると直ぐに広場に向かって歩きだした。直ぐに向かっていた広場には、アルフォンスやグロリアといったイムカ班のメンバーが集まっていた。イムカが来たことに気づいたアルフォンスはイムカに話しかけた。

「イムカ、今来たのか」

「アルフォンス、今の状況は？」

「敵の工作によって要塞城壁に有った要塞砲4機全てが爆破された。現在爆破工作を行った敵工作員を探しつつ侵攻してきた敵部隊の規模を確認しているところだ」

そう話していると、無線から連絡が入った。

『こちら偵察班。敵侵攻部隊を確認。敵は歩兵を中心とする歩兵部隊と思われる。規模は約、一個大隊』

それを聞いた後、イムカはアルフォンスに話した。

「私達はこれからどうする？」

「今は隊長達待ちだ。今班長の三人があそこのコテージに行つて起こしに行った。だが…まだ来てないみたいだな。早くしー」

とアルフォンスが話して居ると、話にでていた隊長階級が集まって休んでいた木製のコテージが突然爆発し爆音を響かせて吹き飛んだ。

「なんだと!?!あそこのコテージは確か…」

「アルフォンス、隊長の次に階級が高いのは誰？」

「隊長は少尉だった。そして唯一の士官だった。そして、国境警備隊の隊長たちはみんなあそこに居たはずだ。そして、あそこから誰も出てこないところを見ると…尉官クラスは全滅した可能性が高い…。となると、次は班長クラスになる。俺たち第3小隊の班長クラスは、曹長のイムカと、同じ階級のアデル班長だけだ。残りの班長はみんなさっきので…」

というと、イムカは直ぐにアデルの元に向かうと、アデルに話しか

けた。

「アデル、敵に対して攻撃をしないといけない。部隊の指揮権をわけるのは愚策だと思う。アデル、部隊の指揮をお願い。私は指揮ができない」

それを聞いたアデルは直ぐにイムカに話しだした。

「イムカ、僕にはできない。それに。部隊に所属して、長いのはイムカだ。2人同じ階級の人間が指揮を取る場合、先任の階級の人間が指揮を取るのが普通だし、何より信頼が高いのはイムカの方だ。指揮を取るべきなのはイムカだと思う」

するとイムカは直ぐに首を横に振ると、話しだした。

「アデル、私はダルクス人だからダメ。私が指揮を取ると、要塞司令部はいい顔をしない。司令部からしたら私は生意気なダルクス人ではない。それならば、後々問題が出ないアデルが指揮を取るべき、お願い」

そう言うと、アデルはため息を吐くと、頷いた。

「解ったよ、イムカ。僕が指揮を執る。だけど君の班だけは君が指揮を取るといい。君の指揮に従って居たイムカ班だけは、そのまま君が率いるんだ」

そう言われたイムカは困惑しているような顔を見ると、後ろイムカの両肩を叩いてアルフォンスとグロリア、マーキュリー、ガルドと行ったイムカ班のメンバーがそこには居た。

「イムカ、俺たちはイムカ班だ。俺たちはおまえだからこそ、ここまでついて来たんだ。ここで切り捨てはひどいぞ」

アルフォンスが話すと、直ぐにアルフォンスの横にいたグロリアがイムカの方を見ながら言った。

「イムカ、アタシはガリア軍に所属してそこそこ長いけど、軍の中でダルクス人だからという理由で諦めているのを良く見て来た。だが、アタシは違う。アタシは諦めて無いし、何より力を示し続けていた。

アタシはそんなアタシだからこそ、ついていこうと決めただからね」

それに合わせて、他の班員も頷き、イムカを静かに見た。それを見

たイムカは班員が頷いたのを見て、

「みんな、じゃあよろしく」

「」「了解」「」

それを見ていたアデルはすぐさま第3小隊に向けて話しだした。

「第3小隊全員に命令。イムカ班を除く第3小隊全員は、直ちに要塞に進撃を開始してきた敵歩兵大隊を撃退する。各員の奮闘を期待する。総員、配置につけ！」

その号令に合わせて、イムカ班を除いた第3小隊が次々に要塞外門に向けて走って行った。

第10話 ギルランダイオ要塞防衛戦5

〈ギルランダイオ要塞イムカ班〉

本体を率いていて出発したアデル達とは別に行動していたイムカ達は、これからどう行動するかを考えていた。そこへ、1人の女性がかけてくる。遠目からでも良くわかる水色の髪の女性はイムカ達の姿を見つけると、真っ直ぐ近づいて来た。

「あの、ここにいたはずの第3小隊は今どこに？」

そう言いながら話しかけて来た女性は第3小隊の居場所を聞いてきた。それを聞いたアルフォンスは直ぐに女性に向けて話した。

「第3小隊なら俺たち以外はみんな攻めて来た帝国の奴らの歓迎に行っただぜ。あんた、誰だ？」

すると、アルフォンスの方を見ながら答えた

「私は要塞守備隊第2中隊第4小隊の一員で名をクレア・リーヴェルトと言います。階級は兵長です。貴方がたは？」

「俺はアルフォンス・オークレール。階級はあんたと同じ兵長だ。順に、グロリア上等兵、マーキュリー二等兵、ガルド上等兵、あとは…」
「もう大丈夫です。それで、この班の班長はアルフォンス兵長、貴方ですか？」

と、アルフォンスの話を区切ると、聞いて来た。

「おいおいアンタ、まだアルフォンスの話が終わって無かっただろ？最後まで聞けよ」

ガルドが抗議するように話すと、クレアはかなり急かすように言った

「今は緊急なんです。それで、班長は？」

するとアルフォンスはため息をつきながら話した

「やれやれ。それで、どうかしたのか？」

「この要塞と陣地を結ぶ地下の連絡道に敵の小規模部隊が入り混んでいるんです。現在、要塞守備隊第4小隊が守りについていますが、敵は精鋭のようで、こちら側がかなり押されています。そんな中、隊長の命令でまだ余力があるうちに、援軍を呼びに来た訳なのですが…」

「少し遅かったな、だが。今からなら俺たちが動けるな…どうする？
隊長」

アルフォンスは話を聞いた後にイムカに向けてどうするか聞いた。
「アルフォンスさん、彼女は？」

すると、アルフォンスはやれやれと呟くと

「彼女がこの班の班長、イムカ曹長だ。イムカ、どうする？」

するとイムカはヴァールを持ち直すと、アルフォンス達に向けて話した。

「アルフォンス、それにみんな、良い？」

イムカの問いにアルフォンス達はイムカに顔を向けると、すぐさま敬礼をした。そのままの状態でアルフォンスがイムカに話した。

「イムカ、俺たちはおまえについて行く。率いるのはイムカ、おまえだ。命令をくれ」

それを聞いたイムカはクレアに向けて話した。

「クレア兵長、敵が来ている連絡道に案内して、私達が援軍に行くから」

それを聞いたクレアは直ぐに敬礼をして礼を言うどすぐさま案内を始めた。イムカ達もクレアに続いて移動し始めた。

〈ギルランダイオ要塞連絡道〉

狭い連絡道は各陣地と繋がっていて、バラバラの連絡道が一つに集まる場所があり、そこから少し要塞側に進んだ場所で、帝国軍とガリア軍要塞守備隊が互いに土囊越しに撃ちあっていた。数では優勢のガリア軍だったが精鋭の帝国軍に苦戦していた。

「ちくしょう、援軍はまだなのか！このままだと突破されるぞ！」

「今クレアが呼びに行ってる。戻って来るまで持ちこたえろ！」

そう言いながら、2人のガリア兵が敵に撃ちながら耐えていた。そう言っている間も、また1人、また1人と攻撃を受け数を減らしていた。そうしていた中、守備隊にとって最悪の出来事が起きた。敵の後方からさらに援軍が到着し、火力を強めて来た事と、守備隊第4小隊長の戦死である。この二つの出来事が起きたことにより、守備隊の戦意がかなり低下し、ジリジリと後退し続けていた。そして、駄目押

しといわんがばかりに、死神がやって来た。

「おい…あれは、まさか!？」

帝国軍最精鋭の部隊の剣甲兵部隊が援軍として到着。すぐさまガリア側に進撃を開始して来た。

「剣甲兵だど!?この連絡道突破のために出してきたのか!みんな、剣甲兵に集中しろ!近づけるな!!」

帝国自慢の剣甲兵は、全身を甲冑型の装甲で包んでいて、手持ち型の盾とブレードを持って敵陣に接近、切り込みを行うのを目的としていて、帝国兵士からは最も勇気のいる部隊として敬意を持たれているが、ガリア側に見てみたら、死神上等とばかりに突っ込んで来る悪魔にしか見えなかった。剣甲兵に向けて一斉に銃弾を撃つガリア兵だが、手持ちの盾により上手く当てられなく、逆にガリア兵が次々に倒れて行く。

「もう、ダメだー!!逃げろー!!」

それを見た帝国兵は直ぐに追撃を開始した。戦意も底に落ち、指揮系統も消滅した第4小隊は撤退を開始したものの、次々に剣甲兵と、後方から撃ってくる帝国兵により、みるみる数を減らして行った。そして、ついに、一番後方にいた2人組にまで剣甲兵が追いつき、切りつけようとブレードを持ち上げた瞬間、2人が逃げていた先から銃弾が一気に飛んできた。その銃弾は構えていた剣甲兵に当たると振り下ろした場所が大きくずれ、地面を切りつけた。

「なんだと!？」

焦った剣甲兵の目に写ったものは、至近距離に近づき、こちらにブレードを振り下ろさんと巨大な武器を持ち上げていたイムカの姿だった。

「ま、待っー」

「死ね」

ザンという音が響き、剣甲兵がその場に倒れた。

「おまえは運がない」

そう呟いたイムカは2人の逃げてきた方を素早くみると、ヴァールを素早く構えて、でてきた帝国兵に搭載してあるマグスを撃った。ダ

ダダダダッと、撃つた後、帝国兵が倒れたのを確認したイムカは装填し直すと、逃げてきた2人組を見た。

「第4小隊の人間？」

その問いに頷く2人。するとイムカは自分がきた方を指差して言った。

「おまえたちの仲間のクレアに要請されて援軍に来た。直ぐにみんなここに来る。今のままなら逃げられるけど、どうする？」

「どうするって…」

戸惑いながら答えた2人にイムカは淡々と言った。

「このまま逃げるか、それとも私達とまだ戦うか。逃げるならさっさと逃げればいい。みんなと合流したら私は行く。早く決めて、猶予はない」

その言葉に2人は直ぐに顔を合わせると互いに頷いた。

「俺たちはあんたたちと戦う」

「わかった」

そう答えを聞いたイムカは直ぐに近くに落ちてたガリアンとマグスを2人に渡していると、後方からアルフォンスたちが追いついて来た。

「隊長。地表の味方はまだ持っているが、まだわからない状態だ。となると、こつちが破られたらまずいな」

そう言っているアルフォンスの横をクレアが通り2人に尋ねた。

「どうしてあなたたちはここにいます？残りの味方は？」

その問いに対し、2人のうち、片方が答えた。

「第4小隊は俺たち2人を残して壊滅した。いや、クレア兵長。あなたを入れて三人だな。もはや小隊とは言えない。班以下なんだから…」

「そんな…」

その答えを聞いたクレアは唾然とした後、静かにイムカの方を見て

「イムカ隊長。私達第4小隊の生き残り3名はイムカ班に編入を申請します。決断を」

その言葉にイムカ以外のメンバーは驚きの顔をしていたが、イムカは直ぐに答えた。

「ついて来てもいい。途中で力尽きて倒れても自己責任でいいなら」

「感謝します。イムカ隊長」

許可が出たことを聞いたクレアは敬礼をすると、感謝の言葉を言った。そしてすぐさま、クレアたちを迎えたイムカ班は、帝国側に進撃されている連絡道奪還のために進撃を開始した。

第11話 ギルランダイオ要塞防衛戦6

〈ギルランダイオ要塞連絡道〉

「…ん？貴様は！ガリアの!？」

「遅い！」

曲がりくねった連絡道の曲がり角から不意打ちでヴァールのブレードで一撃で仕留めたイムカは、そのまま近くの土嚢の陰に入る。その後ろからアルフォンスが角から覗き帝国兵の様子を見ながらイムカに話した。

「イムカ、角の向こうに敵兵確認。偵察兵1、支援兵1だ。どうする？」

「心配ない。直ぐに片付ける。アルフォンス、援護を」

「了解した。援護射撃を行う」

「カウント、3…2…1…」

0!と同時にイムカがシールドを展開しつつ突撃を開始し、その後方からアルフォンスが手持ちのガリアンで射撃を開始した。数発が支援兵にあたり倒れる。それに動揺した偵察兵に向けてイムカが突撃、走ったままマグスを撃ち弾を浴びせる。10発撃った辺りで力尽きて偵察兵が倒れた。それを見ていたクレアはイムカの側に近づくと話しかけた。

「イムカ隊長。貴女の武器はかなり独特な武器のようですね。これは…近接・間接両方に対処できるように作られているようですが」

「ん、近接用に敵から鹵獲したブレードを装着できるようにして間接用にガリアン、マグス、パイパーを装着できる。そして対戦車用にランカーを装着できるように作っている。そして敵から身を守る為にシールドを装着し展開できるようにした」

そう言いながらイムカは自分の武器をクレアに見せるようにしながらヴァールを見せて行く。その様子は、側から見てもかなりイキイキしていると判る。イムカが見せながら話していると、先に通路の先を見てきたアルフォンスがイムカに話した。

「イムカ、この先がどうも第4小隊の陣地だった場所のようだ。だが、

今は帝国側が陣地として使用しているみたいだ。土嚢とかも積み直してこちらを待ち構えている。どうする」

その問いにイムカ少し考えた後、近くで敵の様子を見ながら待っていた全員に話しだした。

「これから敵が占拠した陣地を奪還する。グロリア、後方からランカーashを敵陣に当てて土嚢を破壊して。アルフォンス、グロリアの観測をお願い。マーカーリーはグロリアの弾の補給を。ガルドは私についてきて。クレア達は…」

イムカが言いかけたところでクレアが兵種章を見せながら

「私は狙撃兵です。後から合流した2人は、偵察兵と支援兵のようですので、アルフォンスさんたちと同じように援護します」

そう言いながら、クレアは背に背負っていたGSRを取り出した。それを見ていたイムカは敵陣を見ながら

「わかった。クレア、後ろから援護お願い」

「り、了解です。ですが、なぜ私に後ろをもう預けるのですか？後ろから撃たれるという疑問とかは湧かないのですか？」

戸惑いながら聞くクレアに向けてイムカは顔だけクレアの方を向けると短く

「クレアのこと、信じる事にした。頼りにしてる」

とだけ話すと直ぐに前を向き全員に話した。

「みんな、行く。カウント合わせて、3、2、1…アタック!!？」

それに合わせてまずグロリアが装填したランカーashを構えて発射。曲線で飛んでいき敵陣に到達。陣の土嚢を破壊していく。それを見ながらイムカは敵陣に到達。素早く敵の1人にブレードを斬りつけ倒した。

イムカと同時に到達していたガルドはイムカに合わせて別の兵士にマグスを浴びせた。

「敵2人撃破。そのままいくよ。ガルド」

「アイ、ママ隊長」

そう言いながら態勢を立て直してきた帝国兵が銃を向けた瞬間、後ろから“ターン”という音が響き帝国兵が真後ろに跳ねて倒れた。

イムカが後ろに目を向けるとさつき出てきた土囊からクレアがGS Rで狙っていた。さらに”ターン”ターン”と2発鳴りまた1人倒れていく。無線から直ぐに

『敵2人撃破。このまま制圧しましょう』

とクレアの声が聞こえてきた。それを聞きながら周りを見渡すと、またガルドが1人倒していて、後数名しか残っていないかった。それに向かってイムカは直ぐにマグスを浴びせて倒しつつもう1人に接近しシールドを展開しつつ敵兵に突進しぶつけた。その勢いに敵兵は押されて倒れた。それに追撃を加えるようにブレードを一気に叩きつけた。一瞬で2人倒され部隊が壊滅しているのをみた帝国兵が1人、また1人とその場から逃げていく。そしてその場から帝国兵が居なくなっていた。直ぐにクレア達が合流しながら話し出す。

「制圧完了…ですね。このあと、どうしますか？隊長。」

「このまま第2陣地連絡道に行く。このまま第2陣地を奪還。正門に攻撃してきている帝国部隊の側面から急襲。敵に打撃を与え撤退させる」

「でしたら隊長。第2陣地には確か迫撃砲が有ったはずですよ。まだ敵に破壊されてなければ使えるはずですよ。これを利用しませんか？」

「だか…迫撃砲を使える者は居るのか？私の班には居ないのだから…」

「それについては大丈夫ですよ。私が使えますので。いかがでしょうか」

「わかった。ならばクレア、迫撃砲が有った場合は、使用し援護射撃をして」

「アイ、マム」

そして敵が来てないのを確認すると、イムカが発した。

「これより第2陣地を奪還する。みんな、行くよ」

「…アイ、マム!!？」

第12話 ギルランダイオ要塞防衛戦7

〈ギルランダイオ要塞防衛第2陣地〉

「流石にそこそこ居るな…よし、戻るか」

地下連絡道を制圧しそのまま第2陣地に出る出口付近に身を隠して陣地内を偵察していたアルフォンスは直ぐに身を翻すと真っ直ぐ連絡道に潜んでいたイムカ達の元に戻った。

「イムカ、陣地の様子を見てきた。戦車の姿は確認できなかったが、そこそこ数が居るぞ。少なくとも偵察4、突撃5を確認した。それから、要塞の味方の様子も見てきたが…警備隊第3中隊の軍旗が確認できなかった。恐らく壊滅した可能性が有るな。まだ持ちこたえてる状態みたいだが…ゆつくりはできそうにないな」

アルフォンスの報告を聞いたイムカは周りのみんなの顔を見て頷くとクレアに話しかけた。

「クレア、陣地攻略に向けて何か作戦有る？」

「そうですね…第2陣地に出る出口は二箇所ありますから、今私たちが居るこの出口から敵の注意を引きつけるのでその隙にもう一方から少数で出て挟み撃ちで殲滅。これならいかがでしょうか？イムカ隊長」

「背後から挟み撃ち…じゃあ私が注意を引く陽動になる」

「いえ、隊長は背後からの強襲でお願いします。メンバーとしては連携の取れてるアルフォンスさんとガルドさんを連れて行ってください」

「…わかった。じゃあアルフォンス、ガルド、ついてきて。」

「了解」

〈ギルランダイオ要塞正門〉

夜襲に成功し、二つの防衛陣地を簡単に落とした帝国軍だが、正門攻略を開始してすでに3時間が経とうとしていた。だが、正門を硬く閉めさらに城門側の防衛陣地攻略に手間取り予想以上に長引いていた。

「まだ突破出来ないのか!?!前線は何をしている!」

「はっ、前線は現在反撃に転じてきたガリア軍の連中により防衛線が構築されていて粘り強く抵抗しており未だ突破出来ておりません」

「そんなことは見ればわかる！その事に対しての行動はしておるのか！と聞いているのだ」

「は、現在突破に向けて第2陣地の連絡道を通って敵を内側からも攻撃するために部隊を送っています。一番新しい報告で抵抗してきた部隊を壊滅させたと報告が来ています。まもなく攻撃が開始できると思われます」

「内側からの攻撃までしばらく待機か…」

〈ギルランダイオ要塞防衛第2陣地〉

要塞攻略に向けて侵攻してる部隊の攻撃を見つつ待機していた帝国軍は突然降って湧いたガリア軍の攻撃に対する反撃を行なった。

「報告！連絡道よりガリア軍の攻撃を確認。数は少数ですが攻撃力が高く、現在偵察2名が負傷しております」

「直ちに援軍を送れ!!？ここは前線の味方にとってすぐ退がる事ができるための拠点だ！後方の憂いを無くすためにも速やかに敵を殲滅せよ！」

指揮官の命令に応じてさらに突撃4名偵察4名がクレア達が陽動を行なっている進入口に援軍として行動した。それを確認したクレアが周りに伝えた。

「総員に通達。敵はさらに勢いを増して来ます。土嚢などに隠れなさい。被弾しないように攻撃から守りなさい」

「「イエス、マム！」」

クレアの命令に合わせて隊員が一斉に防衛に向けて行動を開始し火力を集中し始めた。それを別の進入口から見ていたアルフォンスがイムカに話した。

「イムカ、敵は完全にクレア達に集中し始めた。今なら行けるぞ」

「わかった。アルフォンス、ガルド、2人ともついて来て、一気に殲滅を開始する」

「了解」

イムカの命令に合わせてアルフォンスとガルドがイムカと共に地上に出ると、敵陣に突っ込んでいく。

「イムカ、11時方向敵の指揮官らしき姿確認。士官クラスだ、突っ込むか？」

「問題無い。一気に終わらせる。ガルド、ついて来て。アルフォンスは周辺警戒」

「了解だ！ 姐さん。敵確認、突撃2随伴だ。いくぜえええ!!？」

ガルドとイムカが同時にマグスを撃ちながら一気に距離を詰め敵突撃兵を仕留めると、すぐさまイムカが指揮官に肉薄して、ブレードを首筋に突き立てた。

「き、貴様…ガリア軍のダルクス人か…くそ、ダルクス人ごときに…」

「おまえは運がない。これでおわりだから」

「ま、まっ…」

何か言おうとした指揮官をブレードで斬りつけた。指揮官はその場に倒れた。

「指揮場を落とした。このままクレア達と挟撃する。いくよ、2人も」

「了解、隊長」「了解した。姐さん」

それからイムカ達が挟撃した帝国軍は背後からの強襲に対応できずに次々に倒されて行った。さらに陽動をしていたクレア達も一気に攻撃を開始。短時間で第2陣地の敵の殲滅に成功した。

「イムカ隊長。今回の戦闘報告ですが、敵の陽動中に第4小隊は私を除く生き残り2名も戦死しました。被害は軽微とは言えませんが一応成功と言えるでしょう。そして、第2陣地内の迫撃砲ですが、どうやら鹵獲しようとしたようです。そのおかげが大して壊されておらず、直ぐに砲撃可能です」

「わかった。クレア砲撃準備を開始して。アルフォンス、観測をお願い。ガルドは私について来て周りの警戒。グロリアとハーキュリーはクレアの手伝いをお願い。みんな、もう少し頑張ろう」

「了解！」「了解！」「了解！」

帝国軍による夜襲開始から3時間半、イムカ達による第2陣地攻略

により停滞していた戦場が動こうとしていた。